

日本の博物館における ジェンダー表現の課題と展望

歴博展示に触れつつ

Current Problems and Future Issue of Gender Representation in Japanese Museums :
with Reference to Archaeological Displays at the National Museum of Japanese History

MATSUMOTO Naoko

松本直子

はじめに

考古学的な研究成果を分かりやすく示すことは、教育効果を高めるうえで重要であるが、過去の人々の行動や様子を具体的に復元する際には考古学的な証拠が得られない部分についても推定によって補わざるを得ない。推定に任される部分は、時代が古くなるほど大きくなる傾向があり、そこに現代的な感覚や思考が投影される傾向がある。

復元展示におけるジェンダー表現の偏向は、現代のジェンダー認識に大きな影響を与えかねない深刻な問題である。過去の社会がどうであったか、という認識は、「昔からそうであった」として現在のあり方を正当化する根拠となる。一般的には、先史時代のジェンダーについては、漠然とした推測や思い込みで語られることが多いが、博物館における展示はそれを正当化する学術的根拠となりうる。復元画やジオラマのような視覚的表象は、非専門家にとっては文字で書かれた情報より理解しやすいため、影響力も大きい。そこに現代的なジェンダー・バイアスが投影されていれば、意図せずして現代のジェンダーのあり方を再生産することに貢献してしまう。過去の社会に関する視覚的表象は、絵本、イラスト、漫画やテレビ・コマーシャルなど、多様な媒体に存在するが、博物館展示は専門家が学術的な成果に基づいて製作したものとして信頼度が高く、社会的責任も大きい。

バイアスを検討する視点

考古学者が暗黙のうちに現代的なジェンダー・ステレオタイプに依拠した研究や表現をすることによって、男女の役割は生物学的に決まっており、普遍的で、歴史的に変化することもない、という認識を再生産してしまっていることは、1984年のコンキーとスペクターの論文で明確に指摘された[Conkey and Spector 1984]。その後、考古学的成果の視覚的表現における問題にも注意が払われるようになり、経済的、社会的、政治的主体として成人男性の活動に焦点があたることが多く、女性や老人、子どもの活動は軽視されてきた傾向があることが指摘されている[Moser 1993]。表現される人物の数において、成人男性が他のジェンダー・年齢カテゴリーを上回っているというこ

とだけでなく、具体的な表現方法についても批判的な検討が加えられてきた。たとえば、旧石器時代の生活を描いた231点の復元画を分析したギフォード・ゴンザレスは、数多く描かれている男性が誰も子どもや女性、年長者に触れていないことを指摘している [Gifford-Gonzalez 1993]。子育てや親密な関係、ケアなどは社会的に重要であるにも関わらず、またそうした行為が過去に行われていた可能性は高いにも関わらず、ほとんど表現されることがないのは、復元画の製作に携わる考古学者やイラストレーターにとってそれらは「男の仕事」とはみなされないためであろう。狩猟や石器作りに比べて、考古資料から直接復元しにくいため、とも考えられるが、そうであれば女性についても積極的に子育てやケアなど表現を採用することには慎重であるべきである。

過去の社会や文化に関する視覚的表象におけるジェンダー・バイアスについてチェックすべき点として、これまで指摘されてきたことをまとめると、次の5つがある。

- 1) 確実性：具体的な考古学的証拠に基づいているか。
- 2) 可視性：女性、子ども、老人が、成人男性と同程度表現されているか。
- 3) まなざし：誰の視点で表現されているか、男性の視点に偏っていないか。
- 4) 現代的ジェンダー・バイアス：性役割や家族のあり方に現代的なジェンダー観が反映されていないか
- 5) 多様性：ジェンダー・アイデンティティやセクシュアリティの多様性について考慮されているか

復元の確実性については、復元を行う側は当然認識しているが、完成した展示を見る側にはどこまでが考古学的証拠に基づいているのかを判断することが難しいという問題がある。使っている道具の形状や食べているもの、住居の構造などは具体的根拠に基づいていても、そこにどのような人物を配し、誰にどのような行動をさせるかについては、確固たる考古学的根拠がないことが多い。旧石器時代から縄文時代にかけての狩猟採集社会については、文献史料もなく、学術的な根拠として民族誌に基づく推定が重要な位置を占める。さらに、家族構成や姿勢などについては、見る側にとって違和感のないように、現代的な感覚に基づいて復元されることも多い。こうした確実性においてさまざまなレベルで復元されたものも、見る側にとっては区別されずに認識されてしまう。

考古学的に直接復元することが難しい性役割については、民族誌が根拠とされることが多い。男性は狩猟、女性は採集、という生業活動における分業や、男性は石器作り、女性は土器作り、という道具製作における分業は、民族誌に基づくものとして、復元展示でよく見られるものである。しかし、民族誌における性役割分業は、地域や文化によってかなりの多様性がある。とくに、生業については、植物質食料が豊富な低緯度地域では両性による採集活動が生業の基盤となることが多く、高緯度地域では男性による大型動物の狩猟が中心となるなど、環境による一定の傾向がみられる。狩猟対象動物が比較的豊富で、狩猟によって高いカロリーが得られる場合、そして男性による女性のイデオロギー的・政治的支配がほとんどない場合には、女性が狩猟を行うことも知られている [Noss and Hewlett 2001]。185の民族誌データを用いた性役割の分析によると、ドメスティックな土器作りや機織りなど、女性が担うことが多いとされる仕事はあるが、地域的な多様性がある。ユーラシア東部についてみれば、土器作りについて性役割が分かっている12の社会のうち、女性のみが土器を作る社会は5つだけであり、男性のみ、ないし男性が主として行う社会が5つ、男女がと

もに行う社会が2つと、特に女性が行うという傾向はみられない。男性の仕事とみなされることが多い石器作りについても、母から娘へ技術が伝達される事例もある [Brandt and Weedman 2002]。つまり、全体的な傾向はあっても、個別の社会における男女が何をしていたかを確実に推定することはできないのである。それにも拘わらず、ステレオタイプ化された性役割に基づく復元は数多く生み出されており、それがどこまで確実な根拠に基づいているかを判断できない場合は、不確実な推定も含めた復元像全体が過去の姿として認識されることになる。

現代的ジェンダー・バイアスの投影については、菱田（藤村）淳子が大阪府立弥生博物館の竪穴住居で食事をする弥生人家族のジオラマについて詳しく言及している [菱田 2006]。父親が胡坐をかいている隣に正座をした母親が食べ物差し出すというシーンについて、なぜ一日農作業をしていたはずの女性が給仕をしているのか、なぜ男性は胡坐で女性が正座なのか、と菱田が同館の学芸員に問うたところ、見る人に違和感を抱かせたくないということが理由であった旨が述べられている。展示をする側にとっては、具体的な証拠がある道具のかたちや住居の構造などを伝えることが主眼であるため、よく分からない部分についてはあまり見学者の注意を引きたくないというのが実情であろう。しかし、違和感のない復元というのは現代的な感覚に沿った表現に他ならず、結果的に現代的性役割は普遍的で不変なものというイメージを与えてしまう。

可視性については、海外では、博物館展示や復元図においても成人男性が表現されることが多く、女性や子供の表現が少ないことが指摘されているが、日本においては後述するようにこの点でやや特異な状況がみられる。

まなごしという概念は、誰の視点で評価・製作されているか、ということを実験的に検討するのに有効である。現実にかかる出来事は同じであっても、それを誰の視点で見ることによって見え方は異なる。復元画やジオラマにおいては、前景にあって目を見ることができるように表示された人物に見学者は感情移入しやすいとされる。

考古学的展示におけるジェンダーの多様性については、世界的にも対応が遅れている。ジェンダー・アイデンティティが身体的な性と異なる人や、人生の途中で自らのジェンダーを変更する人、異性愛規範を外れたセクシュアリティの表現などは、考古学に関する博物館展示や復元画において今後の展開が期待される場所である。

以上は考古学における視覚的表現をめぐる議論であるが、2003年（平成15年）に内閣府男女共同参画局から出された「男女共同参画の視点からの公的広報の手引き」には、上記と共通する表現ガイドラインとして以下の5点が示されている。

1. 男女いずれかに偏った表現になっていませんか？
2. 性別によってイメージを固定化した表現になっていませんか？
3. 男女を対等な関係で描いていますか？
4. 男女で異なった表現を使っていませんか？
5. 女性をむやみに“アイキャッチャー”にしていませんか？

こうしたガイドラインを示す理由として、「言葉やイラストなどの表現は、繰り返し使われることにより、人々のものの見方に影響を与えます。何気なく使っている表現が性別イメージの固定化につながることを再認識していただくとともに、伝えたい内容や対象に合わせた、効果的な表現の

工夫をお願いします」との文言が付されている。公的広報と学術的表現である博物館展示は性格が異なるものではあるが、現在の性役割分業や家族のあり方を固定化することにつながるため、細心の配慮が必要とされる点は共通している。考古学的復元の方は、現代だけでなく、過去の状況に対する「お墨付き」を与えることになる可能性があるため、更なる慎重さが求められる。

歴博展示におけるジェンダー

以上のような視点から、国立歴史民俗博物館の第1展示室（先史・古代）における展示を見ると、いくつか気になる点がある。第1展示室はリニューアルのため2016年5月から2019年3月まで閉室となっているが、リニューアル前の展示について、歴博共同研究「日本列島社会の歴史とジェンダー」（研究代表者：横山百合子）の研究活動の一環として2016年2月7日に見学を実施した。

第1展示室へ向かう通路には、現代から過去へと遡るタイムトンネルを意識させる演出となっているが、遺跡の写真をバックに弥生人の少女と縄文人の男性が並んで立っている姿が描かれている（図1）。縄文人男性は土器と石斧を手に持ち、背中に槍を背負っていて、各種生産活動に従事していることを想起させるが、弥生人の少女は白い服に赤い帯を締め、勾玉の首飾りをして、右手をほほに添えて小首をかしげており、かわいらしさが強調された表現となっている。それぞれの復元の背景には学術的な根拠があるものと思われるが、ここでは特に説明もないため、見学者が受ける印象は働く男性とかわいらしい少女ということになるだろう。

展示室には、岩手県の貝島貝塚で出土した人骨に基づいて男女一人ずつを復元した人物像が展示されているが、ここでも男性は40歳代、女性は18歳前後と、年長の男性と若い女性という組み合わせとなっている（図2）。この復元像が製作された際に人骨の選定がどのようにしてなされたかは不明であるが、結果として年長男性と若い女性という組み合わせが繰り返し提示される状況となっている。また、復元された女性像はどんぐりが入った土器を持ち、男性は弓矢を持つことで、女性は採集、男性は狩猟という性役割分業も表現されている。

縄文時代前期から中期にかけての大規模遺跡である青森県三内丸山遺跡の復元ジオラマは、遺跡全体をミニチュアで再現し、そこで活動する縄文人たちを人形で表現したものである。人形が小さく男女の判別が難しいため、一見して明確な性役割分業があるようには見えないため、さまざまな活動が行われていたことを示しつつもジェンダー・ステレオタイプの固定化にはつながりにくそうである。しかし、より詳しいことを知りたい見学者のために用意されているデジタル解説を見ると、実は土器作りは女性、狩猟は男性といった性役割が厳密に区別されて表現されていることが分かる。

縄文時代の資料を展示している部屋の中央には、日本列島各地で出土した多様な形態の土偶のレプリカがまとめて展示されており、女性の身体を表した象徴的人工物が縄文社会において重要であったことが示されている。これは、次の弥生時代の展示室に入ったときに、鎧を身につけ、楯を持って戦う男性像が正面に置かれていることと対照的である。

弥生時代の展示におけるその他の視覚的表現としては、銅鐸を使った祭りを描いた復元画のパネルがある。その内容は、鳥取県稲吉角田遺跡出土の弥生土器に描かれたものをはじめ、絵画資料に基づいて復元されており、銅鐸を吊るした木を中心に祭祀を執り行うのは女性たちであり、男性はその周りを輪になって踊る様子が描かれている。復元画は安芸早穂子によるもので、女性が中心と



図1 展示室入口通路で見学者を迎える縄文人(右)と弥生人(左)



図2 貝島貝塚出土人骨の復元像

なって祭祀を行う表現は珍しい。

以上、歴博の第1展示室におけるジェンダー表象について気がついた点を指摘した。先に述べた視覚的表象におけるジェンダー・バイアスのチェック・ポイントと照らし合わせると、表現されている数としては、男女でほとんど偏りが無い。土偶の展示、銅鐸祭祀の復元画など、女性が中心的に表現されているものもある。しかし、女性が中心となる表現は、いずれも祭祀的な性格のものである。経済的活動としては、縄文時代については、女性は採集と土器作り等、男性は狩猟という、固定的な役割が示されている。

日本における考古学的ジェンダー表象の特徴と課題

博物館展示や本のイラスト、ウェブサイト上のイメージ等も含め、学術的・教育的目的で製作された日本における考古学的表象にみられるジェンダー表現にはどのような特徴があるだろうか。これまで著者の管見に触れた縄文時代を対象とする事例から、女性と男性がそれぞれどのような活動をしているかを抽出すると、表1のようになる。女性は食料の処理・調理を中心とする家庭的な活動をしている様子が表現されることが多く、男性は専門的な技術を用いて食料の獲得や生産活動に従事している様子が表現されるという明確な違いがある。母親が家で料理をしているところに父親が狩りから帰ってくるシーンは特に人気がある。これは、現在の日本社会の状況と関係した特徴かもしれない。

2012年から2014年にかけて放送された味の素の企業CMでは、母親が二人の子供に朝食を作り、お弁当を持たせて保育園に連れて行き、仕事の後で保育園に迎えに行き、夕食を食べさせるという一日の映像の中に、過去のいろいろな時代の母親が食事を作るシーンが挟み込まれていた。何十万

表1 縄文時代の視覚的表現における性役割

女性	男性
料理	狩猟
食料加工	漁労
土器作り	狩猟からの帰還
食料採集	道具作り
育児	家作り
食糧貯蔵	魚処理
儀礼的活動	儀礼的活動
編布作り	漆製品作り
残滓廃棄	横になる

年も前から母親がご飯を作ってきたという歌をバックに、旧石器時代の母親が子供に肉を焼いているシーンのアニメーションも挿入されている。このCMへの賛否についてはインターネット上で多くの意見が出されたが、考古学的にみれば何十万年も前から母親だけが食事の準備をしてきたということはありえない。現代日本社会における性役割意識をダイレクトに過去に投影して製作されたものである。

母親が食事を作るということに加えて注意を引くのは、父親の存在感のなさである。ソファに座ってパソコンを使う姿や子供の着替えを手伝う姿が瞬間的に

映るが、食事の準備はおろか、食事をとるシーンにも父親は登場しない。ドメスティックな場における父親の不在というのは、労働時間が長い現代日本社会の特徴であろう。総務省の調査によると、1990年以降、週60時間以上の長時間労働をしている男性の比率は下がってきているが、子育て世代の30代、40代男性の15%以上が2016年においても週60時間以上就業している。また、日本の女性が家事・育児にかかる時間は他の先進国と比べて高く、男性が家事・育児にかかる時間は最低水準である（内閣府 online）。山梨県立考古博物館で2010年に開催された特別展「発掘された女性の系譜—女性・子ども・家族の造形」の図録に、縄文時代の足形付土製品に関する復元画として女性たちが子供の足形をとる情景が描かれているが、そこに男性が一人も登場しないのは、昼間は男性は家におらず、育児に関わらないという現代日本社会の特徴が投影されているように見える〔山梨県立考古博物館2010〕。

1980年（昭和55年）には専業主婦世帯が共働き世帯の倍近くあったが、1990年代には共働き世帯の方が専業主婦世帯より多くなり、2015年には前者が後者のほぼ倍となっている〔内閣府男女共同参画局 online〕。したがって、母親が家で料理を作っているところに父親が狩りから帰ってくるというイメージは、高度経済成長期から1980年代にかけては見学者にとって「違和感なく」受け止められるものであったが、現在はそうではなくなっている可能性もある。

女性は採集、男性は狩猟という分業が想定されているケースが多いが、女性が採集活動をしているところは、男性の狩猟シーンに比べると表現されることが少ない。国立歴史民俗博物館における三内丸山遺跡の復元ジオラマのように、男性が狩猟、女性が採集といった性別役割分業は一貫して表現されることが多く、女性が狩りや漁をする様子や、男性が採集活動をする様子はほとんどみられない。男性が屋内で作業をしているときは、漆製品の製作などの特別な仕事をしていることが多い。すなわち、男性は経済的活動の主体として描かれることが多く、料理や育児などの家庭の仕事をしている様子はほとんど表現されない。

グローバル・ジェンダー・ギャップ・レポートにおける日本の順位は低迷しているが（2016年度は144か国中111位）、その原因は女性の経済的、政治的領域への参画が伸び悩んでいることによる。日本における男性の家事にかかる時間が極めて少ないことを考えると、こうした考古学的復元における傾向がどのように生まれ、また考古学的復元がそれを見るものにどのような影響を与え

るのかについて、もっと真剣に考えるべきである。

家で料理をしている母親の表現が多いことは、日本の特徴である。先に述べたように現代日本の性役割において料理は女性がするものという意識が強いことがその背景にあると考えられるが、料理をするシーンが多いことの理由のひとつは、土器の用途を示そうとする意図であろう。土器は日本考古学におけるもっとも豊富で重要な考古資料といえるからである。このことが、ステレオタイプな性役割に限定されてはいるが、結果的に女性が登場する機会を増やすことにつながっている。母親が家で料理をし、父親は仕事から帰ってきて、家族そろって夕食を食べるというイメージは、現代日本における「理想的な」家族生活を映したものであり、現代社会の実態にも即していないし、狩猟採集民の復元としては現実的ではない。

民族誌をみると、北米の Washo Indian のように、男女が共同で狩猟・採集を行うこともあり、タンザニアの Hadza のように、男女とも採集を行うが、基本的に別々で行動するというケースもある。カナダのヘアー・インディアンのように、ほとんどの仕事が男女どちらでもよいという文化もあり [原 2008]、どちらかと言えば女の仕事、どちらかと言えば男の仕事、というような緩やかな規範である場合もある。社会の中でも堅果類をはじめとする植物質食料が重要であったと考えられる時期・地域においては、女性の経済的貢献度が高かったことや、男女ともに採集活動を行ったことが推定できる。経済的貢献度は、さまざまな社会的権利や意思決定における格差と密接に関連しており [Friedl 1978]、女性の経済的役割の大きさが、土偶に見られるような女性の象徴的重要性につながっていたとも考えられる。しかしながら、食料の獲得者としての女性は視覚的表現としては低調であり、料理や土器作りといった特定の活動が高い頻度で表現されているのが現状である。

まとめと展望

日本における縄文時代の視覚的表現においては、女性と男性は、数的には同じくらい表現されているといえる。歴博の展示においても女性の数は男性に遜色ない。しかし、女性には若い女性や少女が目立つが、男性はそうではない点は、女性が一種のアイキャッチャーとして位置づけられている可能性を示している。たとえ若い女性の社会的立場が弱い社会であっても、子育てが終わる中年世代になると女性はさまざまな制約から自由になり、社会的役割や権威が増大することが多い [Brown 1982]。実際土偶の中には下垂した乳房で中年女性を表したとみられるものもある [松本 2016]。しかし、その世代の女性が復元展示で表現されることは稀である。

現代社会のジェンダーのあり方と、過去の復元イメージの間には、双方向的な影響関係がある。学術的な復元は、エンターテインメントやコマーシャルなどにおける多くの非学術的なイメージの生成にも影響を与え、私たちの世界の見方にも影響を与える。女性の経済的、社会的な役割が見えない復元ばかりでよいのか、正面から向き合って検討する必要がある。ステレオタイプな視覚的表現が生み出され続ける背景には、考古学者や博物館学芸員におけるジェンダーの不均衡があるかもしれない。研究者の性比のアンバランスは、多くの国でかなり改善されてきたが、日本においてはまだまだ大きな課題である。作る側の視点の固定化が変化を阻む要因となっており、そこで生み出されるステレオタイプな復元が、女性考古学者の増加を阻害しているかもしれない。

ステレオタイプなイメージが作り続けられるもう一つの理由として、教育的意図があると思われる

る。復元イメージが来館者にとって親しみやすくなるように、意図的に、あるいは意図せずして、現代の性役割が過去の社会増に投影される。その結果、過去の社会においては実際には存在した可能性の高いジェンダーの複雑さや多様性は、復元に入り込む余地がなくなってしまう。そして、ステレオタイプなイメージが繰り返し作成されることで、特定の性役割が永久不変に存在しているかのようなメッセージを発してしまうことが懸念される。

性役割だけでなく、ジェンダー・アイデンティティやセクシュアリティについても、現代とは異なる多様なあり方が過去に存在したことについて意識的に検討することが必要である。性役割やジェンダー間関係について考古学的に明らかにすることは容易ではなく、不明な点が多い。だからこそ、分からないところを安易に現代的ジェンダーや民族誌によって埋めてしまうことは、現代的ジェンダー観の再生産につながるだけでなく、研究の深化を阻害することにもなる。ヒトの社会・文化の多様性、ひとつの文化における個人の多様性を見据えた復元というのが、今後の博物館には求められるのではないか。真摯で科学的な研究が、よりよい復元には欠かせない。よりよい復元をめざす努力が、考古学という学問にとっても、社会にとっても、よい変化をもたらすのではないかと期待する。

引用文献

内閣府「夫の協力」

<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/data/ottonokyouryoku.htm> (2018年5月10日)

内閣府男女共同参画局「男女共同参画白書(概要版)平成28年版 第3章 仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)」

http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h28/gaiyou/html/honpen/b1_s03.html (2018年5月10日)

原ひろ子 1989『ヘアーインディアンとその世界』平凡社

菱田(藤村)淳子 2004「復元ジオラマの中の人物像をめぐる」『平成13～15年度科学研究費補助金成果報告書美術館・博物館の展示における性別役割分業観とその社会的影響の研究』(代表者 森理恵), 107-112頁

松本直子 2016「縄文時代の性とジェンダー」『歴博』第198号, 2-5頁

山梨県立考古博物館 2010『発掘された女性の系譜 女性・子ども・家族の造形』山梨県立考古博物館

Brandt, S. and Weedman, K.. 2002. The ethnoarchaeology of hide working and stone tool use in Konso, southern Ethiopia: An introduction, in F. Audoin-Rouzeau and S. Beyries(eds.), *Le travail du cuir de la préhistoire a nos jours*. Antibes, Editions APDCA, pp. 113-130.

Brown, J. K. 1982. Cross-cultural perspectives on middle aged women. *Current Anthropology* Vol.23, No.2, pp. 143-156.

Conkey, M. W. and Spector, J. D. 1984. Archaeology and the study of gender. *Advances in Archaeological Method and Theory* Vol. 7, pp. 1-38.

Friedl, E. 1978. Society and Sex Roles. *Human Nature*. 1, pp. 8-75.

Gifford-Gonzalez, D. 1993. You can hide, but you can't run: representation of women's work in illustrations of Palaeolithic life. *Visual Anthropology Review* 9.1, pp. 21-41.

Moser, S. 1993. Gender stereotyping in pictorial reconstructions of human origins, in L. Smith and H. duCros (eds.), *Women in Archaeology*. Canberra: Australian National University, pp. 75-92.

Noss, A. J. and Hewlett, B. S., 2001. The Contexts of Female Hunting in Central Africa. *American Anthropologist* Vol. 103, No. 4, pp. 1024-1040.

(岡山大学大学院社会文化科学研究科)

(2018年12月7日受付, 2019年5月28日審査終了)